

〔研究ノート〕

法隆寺の透彫り金具文様

——モチーフ融合およびモチーフ喪失文様考察のための作例資料(1)——

山 本 謙 治

従来の文様研究では、モチーフによる起源・系統論が先行し、個々の文様の形を造形的に分析する方法が確立しておらず、対象文様のなかから立論に都合のよい一部分の形だけを抽出して問題化するといった傾向が強かった。しかしこうしたモチーフ中心の文様研究では、個々の文様の具体的な形がどのようなプロセスをへて成立したのかといった造形展開を分析することはできない¹⁾。また、東アジアにおける文様伝播の状況を巨視的に見れば、原初の文様モチーフの意味が不明となり、ただ形だけが模倣されていくことや、まったく別のモチーフと融合して新たな形をなすことなども容易に予測できることであるが、従来のモチーフ偏重の文様研究では、このようなモチーフ喪失やモチーフ融合の造形展開を問題化することができない²⁾。本稿ではこうした問題意識に基づき、モチーフ喪失・融合文様を考えるにあたって重要と思われる作例を整理していく。

I 玉虫厨子須弥座腰部隅柱透彫り金具文様

法隆寺玉虫厨子透彫り金具文様を、林良一は『奈良六大寺大観』の解説において唐草文様3種10類、連珠文2類に分類している³⁾。このなかで、モチーフ融合プロセスを考えるのにもっとも重要な作例は須弥座腰部隅柱透彫り金具文様である。この金具文様は縦帯状の空間を12のほぼ正方形の区画に分け、その各区画内に他に類例を見ない特殊な文様を独立して配置

している⁴⁾。この文様は一見複雑であるが、空間充填のための文様要素である左右の半C字形3本ずつを取り除いていけば、猪目形空孔山形の単位文様(1)と逆ハート形巻込み曲線の単位文様(2)という二種類の単位文様が組み合わされた複合文様となる(図1)。従来の研究ではこの点が認識されていなかったために、小杉一雄⁵⁾や上原和説⁶⁾のように誤った文様分析がなされることになった⁷⁾。

1. 単位文様(1)

まず外側の単位文様(1)は左右対称の構成で、尖拱形の上辺部①から左右の②と③の2箇所ずつで隆起しながら裾がのび、結束帯④に至る。①から③にかけては平行細線、隆起部分②・③には半C字形が陰刻される。④から先にのびた曲線は湾曲して先端⑤が反転して巻き込むが、反転を始める箇所ですべて左右が2つの結束帯⑥で束ねられる。

2. 単位文様(2)

単位文様(2)は単位文様(1)の結束帯⑥の先で反転して左右に巻き込んだ先端⑤と尖拱形上辺部①との間にあいた空間に配置されるものである。この単位文様(2)の外側輪郭は単位文様(1)の輪郭とは似て非なるもので、上部⑦は尖拱形というよりは明瞭な山形で、単位文様(1)と同様に左右に⑧と⑨の2箇所ずつ隆起しながら裾がのびるが、その隆起の高さは単位文様(1)よりもずっと高く、五山形とでもいうべき形である。また平行細線と半C字形が陰刻されるのは単位文

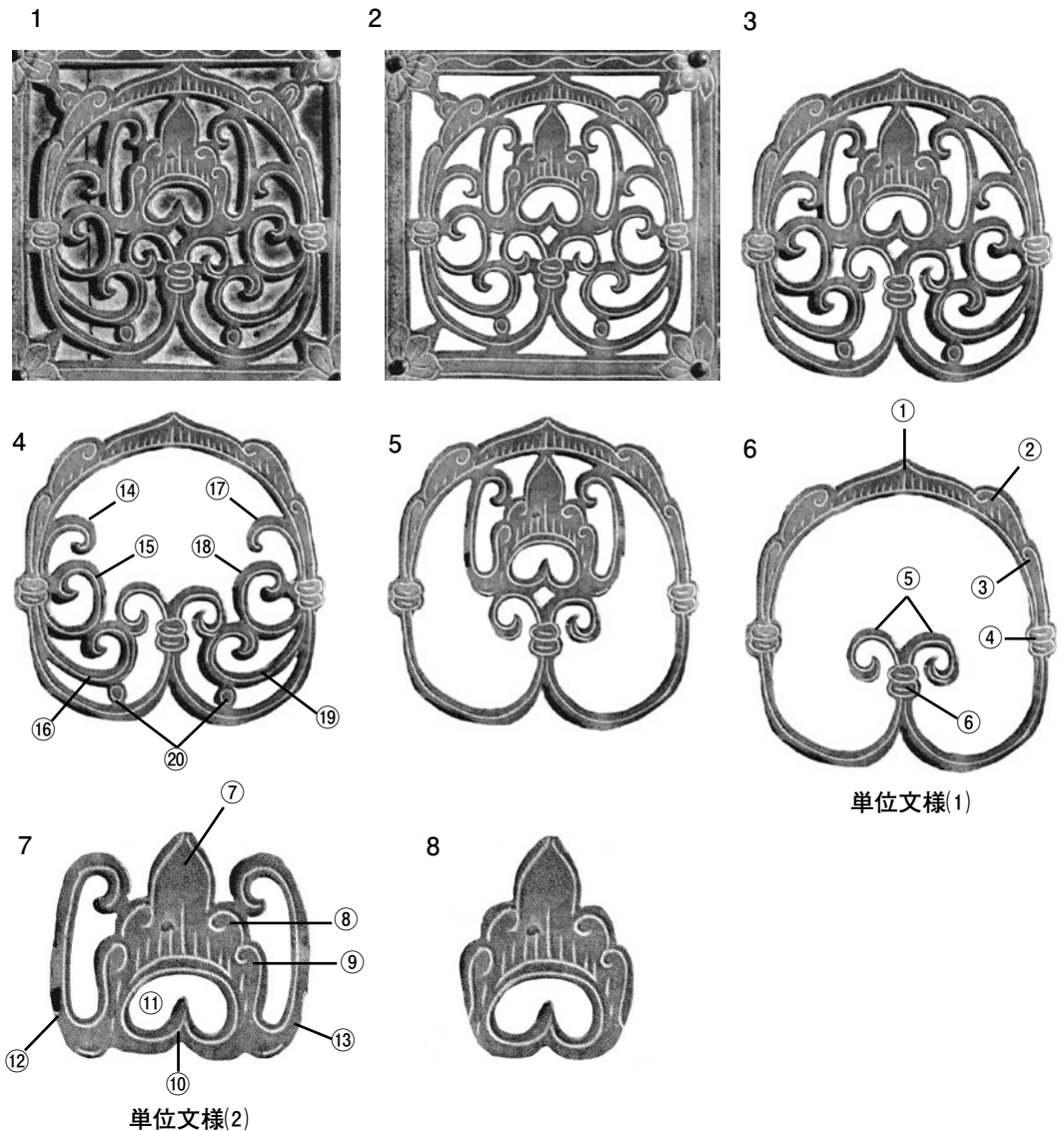
様(1)に同じであるが、それと異なるのは、⑨から先にのびた左右の曲線は⑩において接合してとどまり、単位文様(1)のような結束帯⑥や左右の巻込み⑤を作らない点である。その結果、単位文様(2)の内部には猪目空間⑪が形成されることになる。

この猪目形空孔五山形の左右にはC字形(⑫・⑬)が付加されているが、この2本のC

字形を含めて単位文様(2)と考えるか、これらを単に単位文様(1)と(2)の余剰空間を埋める文様要素と考えるかが問題となる。

単位文様(1)と(2)の隙間を埋める文様要素としては、下記のように6本の半C字形(⑭～⑰)と2個の円形⑱がある。これらの文様要素と2本のC字形(⑫・⑬)が大きく異なる点は、両C字形が五山形の輪郭と融合しており、隆起部

図1 玉虫厨子須弥座腰部隅柱透彫り金具文様の造形分析図



分⑨に刻まれた陰刻線も両C字形(⑫・⑬)の陰刻線へと連続した一本の線になっていることである。この点を重視すれば、C字形(⑫・⑬)は猪目形空孔五山形に対して、後から余剰空間を埋めるために充填された文様要素と考えるよりは、初めから猪目形空孔五山形と一体化した形として、ひとつの単位文様と意識されていた可能性の方が強いであろう。

3. 単位文様(1)と(2)の余剰空間を埋める文様要素

単位文様(1)と(2)の余剰空間を埋める文様要素としては、左側に⑭～⑯、右側に⑰～⑱の3本ずつの半C字形がある。またそれらの最下段にある半C字形⑯・⑱と単位文様(2)の逆ハート形巻込み曲線の湾曲部との間には、左右に1個ずつ円形の文様要素⑳が充填されている。

Ⅱ 法隆寺金堂天蓋透彫り金具文様

金堂内陣に安置される薬師像・釈迦三尊像・阿弥陀像の上には、それぞれ天蓋が懸けられている。三つの天蓋の外形・構造・文様配置などはほぼ同様である(ただし薬師像天蓋は鎌倉時代の摸古作)。堂内の明るさではこれらの細部までを見ることはできないが、外観は上下二重の葺返しをもつ屋根形の天蓋で、軒先に上下四段の垂幕風の飾り板を一材より造り出し、その下端から網状の木製垂飾りを針金で下げ、天蓋の上下ふたつの葺返し板の上面には木製飛天像および銅製透彫り金具が、垂幕板の側面には木製鳳凰像が飾り付けられている⁸⁾。

釈迦三尊像および阿弥陀像の天蓋では下方の葺返し板上縁に金銅透彫りの飾り金具(図2・3)が取付けられている。現在は釈迦天蓋金具(図2-①)と阿弥陀天蓋(図2-②)の四隅の金具が3枚ずつ残存し、釈迦天蓋四周につけられていた図3-③が1枚、図3-④が4枚残存している。

図2-①は四隅の角につけるため、蓮弁形を中央で縦割りにした形の2枚を針金でつなぐ。

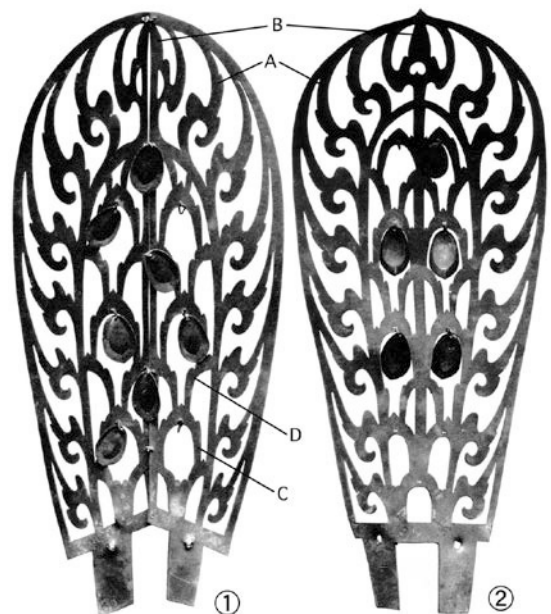
透彫り文様は内外2区に分けられる。外区では瘤節のある虬龍文系C字形を背中合せに2個つないだものを単位文様とし、これを左右に7個ずつ配す。内区では三山形(C)とそれを半截したもの(D)を6段に積み上げる。

図2-②は①が2枚を中央で合せているのに対し、1枚板から造られ点が異なるが、内外区の文様意匠は同じである。ただ外区の単位文様は左右に8個ずつ配され、内区の三山形積み上げは8段になる。また最上部には猪目形の空孔をもつ三山形を曲線で囲んだ特殊な形の単位文様(B)を置く。

図3-③もまた内外区の文様意匠は①や②に等しいが、単位文様レベルでは相違が見られる。まず外区の単位文様(A)を比較してみると、図4のように、③では①や②よりも瘤節の突起部分が強調され数も多い。三者内の形式比較であれば、③→①→②と単純化されていくといえよう。

次に最上部の猪目形の空孔をもつ単位文様(B)については、三山形を五岳形(B1)とで

図2 金堂天蓋透彫り飾り金具1



もいうべき形にまで隆起が激しくなり、これを囲む曲線にもさらにC字形(B2)が付加されて輪郭が複雑になっている。①～③の単位文様(B)を虺龍文の一部である瘤節が独立化した文様系統に位置づけるならば、③が最も古様を示すものと考えなければならないだろう。

図5は①～③の単位文様と玉虫厨子須弥座腰部隅柱透彫り金具文様の単位文様(2)を比較したものである。①は2枚板をつないでいるために猪目形部分が半月形に変形しているが、基本構造は②に等しい。②は図4の単位文様(A)と同様に③の単純化といえる。問題は玉虫厨子の

単位文様(2)であるが、①～③の左右に向き合うC字形(A・B)の上部が先端Cで輪郭部と融合しているのに対して、玉虫厨子単位文様(2)ではA・Bは独立したC字形のままである。こうした相違は単位文様が配置される空間の形に合わせて変形された結果でしかなく、単位文様の構造が同一である以上、①～③と玉虫厨子単位文様(2)は同一の文様系統上にあると考えられる。ただし③が単純化されて玉虫厨子単位文様(2)になったものか、両者の前段階に共通する単位文様の存在を想定すべきものかは即断できない。ここではむしろ玉虫厨子須弥座腰部隅柱透彫り金具文様の単位文様が(1)と(2)の二つから構成される証明として、単位文様(2)に独自の作例展開が跡づけられることを重視すべきであろう。

これら①～③の透彫り飾り金具に対して、明らかに文様系統を異にするのが図3の④である。①～③が蓮弁形で輪郭帯をもち、透彫り文様は幅広であるのに対して、④は楕円形で輪郭帯がなく、透彫り文様は細く繊細である。外区

図3 金堂天蓋透彫り飾り金具2

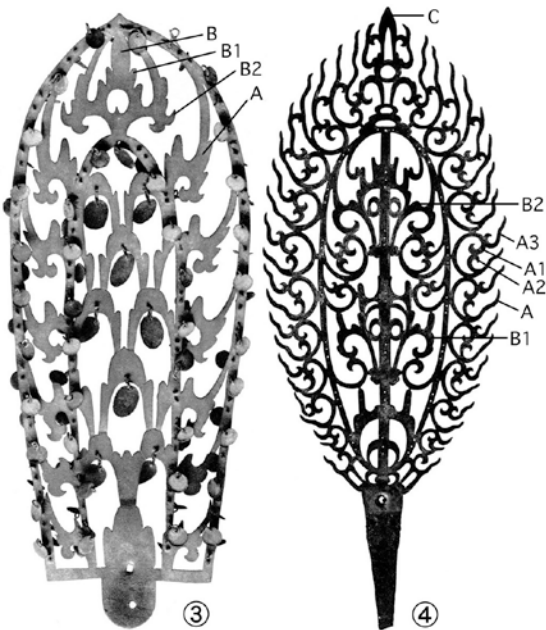
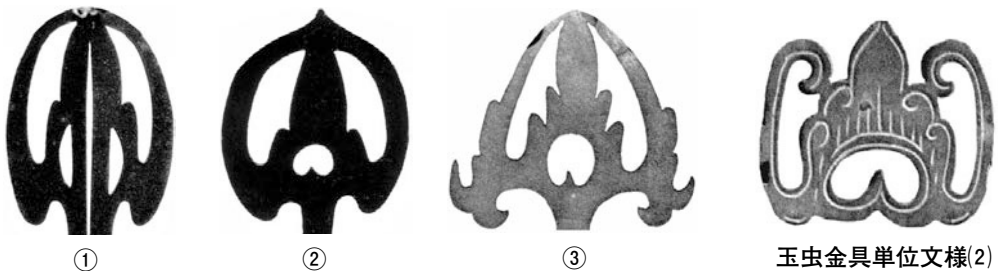


図4 天蓋透彫り飾り金具外区単位文様比較



図5 金堂天蓋透彫り飾り金具猪目形空孔単位文様比較



の単位文様(A)は内区の境界に背中をつけたC字形(A1)に、先端が長くのびた半C字形(A2・A3)を2個組み合わせたものであるが、①～③のC字形や半C字形が虺龍文系の瘤節を想起させる突起部分を多く残すのに対して、④ではほとんどが単純な曲線といえるまでに抽象化され、単純化されてしまっている。ただ内区には2つの図案化された龍顔が縦に並べられ、龍顔の一部に組み込まれた巻き込み曲線(B1・B2)などには、まだ瘤節の突起部が残っている。この作例は動物系モチーフの虺龍文がその本来のモチーフを喪失して抽象的に曲線化された結果を見るには最適の作例だといえる。この作例の完成度からすれば、その抽象化のプロセスはこの作例の前段階に見いだされなければならない。動物系モチーフの虺龍文の系統からすれば、変形プロセスの古様といえる③と変形結果のひとつといえる④が、ひとつの同じ天蓋の透彫り飾り金具として使用されているところが、7世紀日本における新旧両様の混在を示す顕著な事例として認識できる。

Ⅲ 灌頂幡の透彫り文様

現在、東京国立博物館の法隆寺宝物館に展示されている灌頂幡は、四角い傘形の天蓋から、中央に6枚一連の大幡、四隅に小幡4組、四周の各軒先に8枚ずつの蛇舌をつけ、さらにその下に7枚一連となる垂飾をつり下げている。垂飾は当初224枚あったことになるが、法隆寺献納宝物として現存するものは147枚のみで、法隆寺には13枚が残されている⁹⁾。灌頂幡の装飾文様は植物系モチーフが基調となっているが、四隅小幡縁金具や周縁部の蛇舌と垂飾には虺龍文系動物モチーフの要素とその抽象化したもの、さらに植物系モチーフとの融合経緯を見ることができる。

1. 大幡および四隅小幡

大幡の各坪の上端と下端に位置する坪界金具には、中央に配した宝珠形の左右に波状に伸び

る茎と、茎の上下交互に翻転する五葉半パルメットを付けた植物系均整波状唐草文がある。左右の縁金具も植物系の偏向波状唐草文(図6-1)で、波状に伸びた茎の分岐部から反転する茎の先端に五葉半パルメット(A)を付け、その基部からさらに回転する茎が伸び、その先端に五葉全パルメット(B)を配する。これらはすでに完全に植物系モチーフ文様であり、曲線表現にも抽象的な処理はなく植物系の蔓茎を表している。

これに対して、四隅小幡の縁金具(図6-2)では、波状曲線(A)の中央に2つの結束帯(B)をつくり、そこから反転する分岐曲線(C)をのびし、分岐部には紡錘形(D)を挿入し、波状曲線(A)と(C)の間に、猪目形空孔をもつ単位文様(E)を配置し、単位文様(E)の先端にのびる曲線と波状曲線(A)の間には円形文(F)を充填している。

図6 灌頂幡大幡・四隅小幡縁金具文様

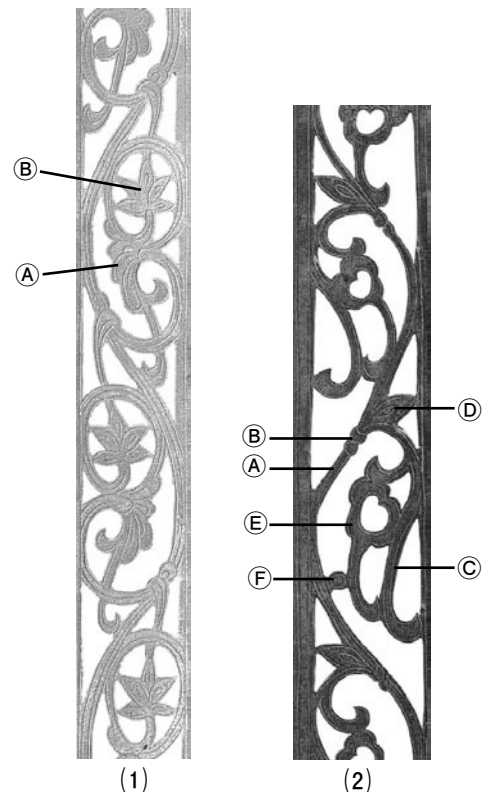
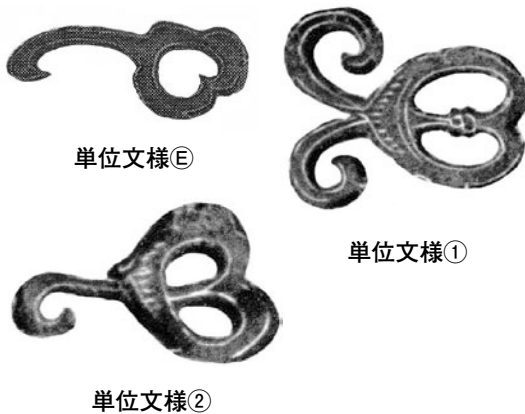


図7 玉虫厨子須弥座上框第二段透彫り金具
単位文様



この単位文様⑤については玉虫厨子須弥座上框第二段透彫り金具の単位文様との関連が考えられる。この金具文様には図7のように二つの単位文様①・②がある。両者のうち原初形と考えるべきは単位文様①であり、これは並行細線のある山形から両裾がのびて逆ハート形に接合して2本の結束帯で結ばれる。さらにその先は山形の背後を通過して、先端は左右2本に別れて巻き込む。単位文様②は単位文様①を狭い空間に充填する場合の簡略形であり、単位文様①と同様に逆ハート形の輪をつくるが結束帯はなく、その先は山形の背後を通過して、先端は左側1本だけとなって反転する。四隅小幡縁金具の単位文様⑤は、この玉虫金具の単位文様②がさらに狭い空間に配置され、猪目形空孔内に曲線をのぼす余地のなくなった場合のバリエーションであろう。

小幡縁金具文様においては、結束帯⑥や分岐部紡錘形⑦は植物系モチーフ文様の要素であり、曲線も植物的な表現になっているが、このシンプルな文様構成の中で、逆ハート形単位文様⑤が植物系モチーフとして登場するのはいかにも唐突であり、余剰空間を充填する円形文⑥の存在も大幡の縁金具に見たような完全な植物系モチーフ文様とは相違する。これは虺龍文系モチーフの抽象化した文様が植物系へと

変化していく過渡的な作例と位置づけてよいであろう。

2. 蛇舌

蛇舌には図8に示した①～④の4種がある。蛇舌①は中央に蓮華文④を配し、その下方左右に五葉全パルメット(③・⑤)を、上方左右に四葉半パルメット(①・②)をのぼす。この四葉半パルメットの脚は上方にのび接合して左右に反転する(⑥)。この反転部分の上に、単位文様①が載せられる。単位文様①は輪郭が〈逆ハート先端巻き込み形〉の文様要素⑥でつくられ、その内部に五葉全パルメットの文様要素③が配されたものである。また単位文様①と下方の四葉半パルメットの反転部⑥との間には紡錘形①が差し込まれている。この単位文様①の文様構造は、玉虫厨子須弥座腰部隅柱透彫り金具文様の単位文様(1)(図9-1)と同様の構造である。ただし単位文様(1)の曲線が上部より左右にのびてきて先端が接合反転して巻き込んだ形であるのに対して、単位文様①では五葉全パルメットをのせる萼状反転部分⑥が左右の上方へと伸びて行って全パルメットの葉の最上部に接続したという形である。こうした〈逆ハート先端巻き込み形〉は、植物系モチーフの視点から考えれば、反転した萼の脚の処理として、他の部分への連続性をもたせることができない場合、独立した単位文様を作るのに簡単な方法であって、玉虫厨子単位文様(1)と同系統のものとは言い難く、また単位文様(1)の簡略形とも即断できない。

蛇舌①が完全に植物系モチーフ文様であり、蛇舌内の三角形空間に複数の文様要素を有機的に配置しているのに対して、蛇舌②は動植物系モチーフ両者の文様要素を混在させて嵌め込んでいったような構成からなる興味深い作例である。中央には猪目形空孔をもつ山形の単位文様①がある。この文様要素①が玉虫厨子須弥座腰部隅柱透彫り金具文様の単位文様(2)において、左右のC字形を除いた文様要素(図9-2)の退化形であることは明らかであろう。

Oct. 2008

法隆寺の透彫り金具文様

玉虫金具文様では単位文様(2)を〈逆ハート先端巻き込み形〉の単位文様(1)が囲んで複合文様を作るのであるが、この蛇舌②の場合は、単位文様①を載せる巻き込み曲線A・Bが頂上部で結合して〈逆ハート先端巻き込み形〉をつくるのではなく、左右別々のC字形C・Dとして、その上方先端が単位文様①からのびた曲線E・Fに巻き付いている。このような形式では左右のC字形C・Dを合わせてひとつの単位文様と考えるよりは、下部の余剰空間に充填されたふたつのC字形C・Dと同様に、C字形C・Dもまたひとつの文様要素と考えた方がよいであろう。こうした文様構造は、玉虫厨子金具文様にみられる単位文様(1)と(2)の複合文様の造形系統とは別のもので、動物系モチーフである単位

文様①を中心として周囲の空間にC字形文様要素を組み合わせて埋めていった構造と考えた方が無理がない。

単位文様①の上方には左右の先端が反転して巻き込んだ曲線①があり、その中央に二重の結束帯②をつくり、それより左右に反転する萼状曲線③をのびし、その上に五葉全パルメット④を載せる。これら四つの文様要素①・②・③・④は、類例のないものではあるが、ひとつの単位文様②を構成している。この単位文様②の部分は、それより下にある単位文様①やC字形文様要素とは有機的な連続性があるとはいえず、蛇舌の三角形内部空間を適宜埋めていったという構成となっている。こうした加算的な構成法と動植物系両者のモチーフ文様要素の混在

図8 法隆寺灌頂幡蛇舌

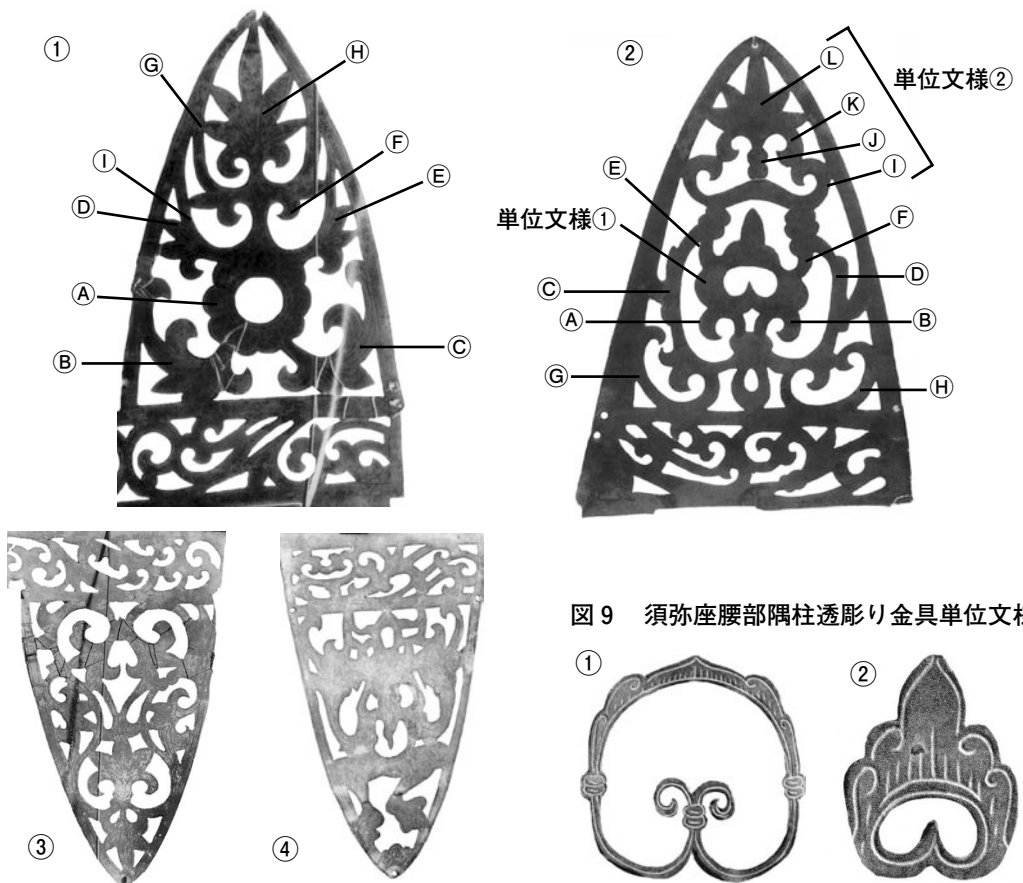
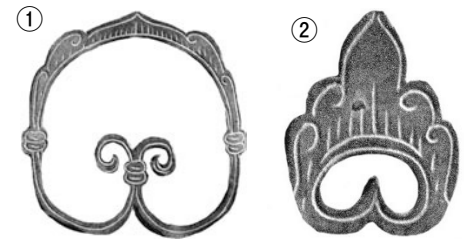


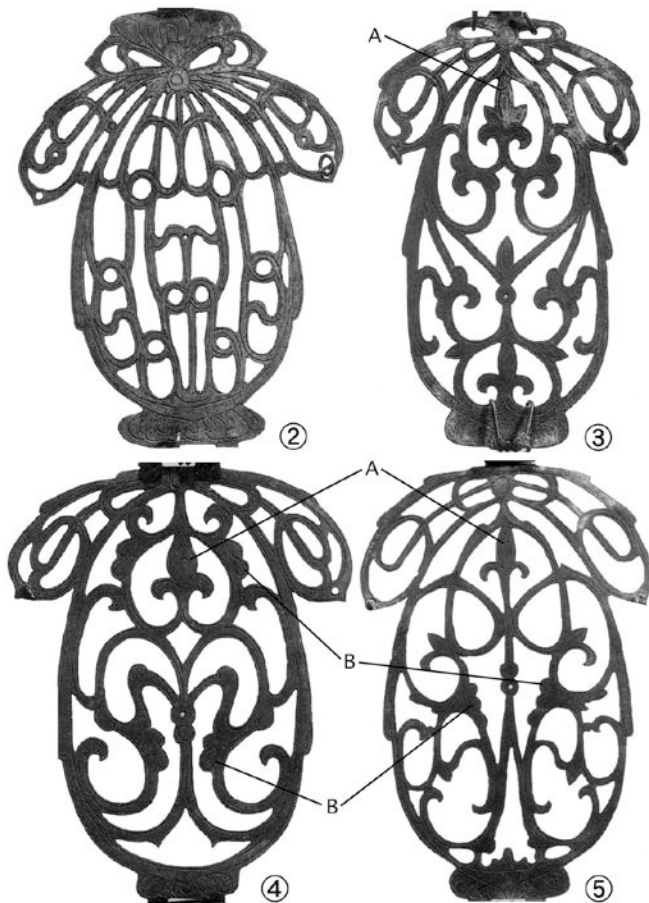
図9 須弥座腰部隅柱透彫り金具単位文様



は、この蛇舌②の文様が、動物系モチーフの抽象化から植物系モチーフへの融合へと展開する過渡期の作例であることを示すものである。

蛇舌③は蔓茎状の曲線の先端に萼状反転曲線をつくって三葉全パルメットを配するもので、すでに完全に植物系モチーフ文様となっている。蛇舌④は判別しがたい部分が多いが、鬼神に類するものを全面に配した動物系モチーフ文様のようである。これが魍龍文系であるならば動物系モチーフの古様とも位置づけられるが、独立した一体の鬼神形は各時代で存在するので新旧にはわかに判断できない。

図10 法隆寺灌頂幡垂飾



3. 垂飾

一連となる7枚の透彫り垂飾(上より下へ①～⑦とする)の外形は、それぞれ微妙に異なるが、本体が卵形で、上部が萼状となっている。あるいは全体で蓮花の蕾を表すものであるのかもしれない。透彫り文様はいずれもほぼ左右対称であるが、2種類に大別できる(図10-②～⑤)。

垂飾①・②・⑥・⑦は、図10の②に見るように、全体が輪繋ぎ状の連続曲線によって構成されており、とくに動物系モチーフのC字形や半C字形からの展開と思わせるようなところや、植物系モチーフの波状曲線や巻き込み曲線も見当たらない。すなわち完全な抽象的曲線

構造の文様だといってよい。また単位文様や曲線の構成順序が想定しにくいのも特色で、このようにモチーフにとらわれず、全体をひとつの曲線意匠としてデザインしたような作例は、同時代では極めて類例が少ない。

これらに対して垂飾③・④・⑤ではC字形ないし半C字形曲線の組み合わせが基調となっており、④や⑤では曲線の一部に魍龍文系の瘤節(B)が残存している。こうした曲線文様構造が魍龍文系動物モチーフの抽象的造形化によって生まれたものであることは間違いのないところであろう。このような抽象化の過程で現れるのが、④や⑤に見られる、二本の巻き込み曲線の接点に充填される紡錘形(A)である。これを形から単純に三葉全パルメットと解釈する研究者もいるが、全体の文様構成から判断すれば、この紡錘形だけを植物系モチーフの文様要素とする理由はない。単に曲線構造にできた空白を充填するだけの紡錘形と解釈すべきである。ただし垂飾③ではこの紡錘形が三葉全パルメット形にまで進展していて、魍龍文系動物モチーフを抽象化した垂飾④・⑤の次の段階として、そこに植物系モチーフ文様要素が融合

してきたことを示している。

Ⅳ 法隆寺伝存の透彫り金具文様

法隆寺綱封蔵には数十枚の金具類が伝存している。これらは几帳金具などと推測されているが、形式も多様であって用途が特定されているわけではない。ただいずれも装飾文様としては貴重な作例である。ここでは『南都十大寺大鏡』に収録された透彫り金具 22 作例を対象として文様分析をおこなってみる¹⁰⁾。これらの作例は外形から 5 種に大別される。

1. 透彫り金具第 1 種

22 作例中もっとも数が多いのが、ここに第 1 種として分類する V 字形をした透彫り金具で 15 枚を数える。その装飾文様の形式には次の 4 つのタイプがある。

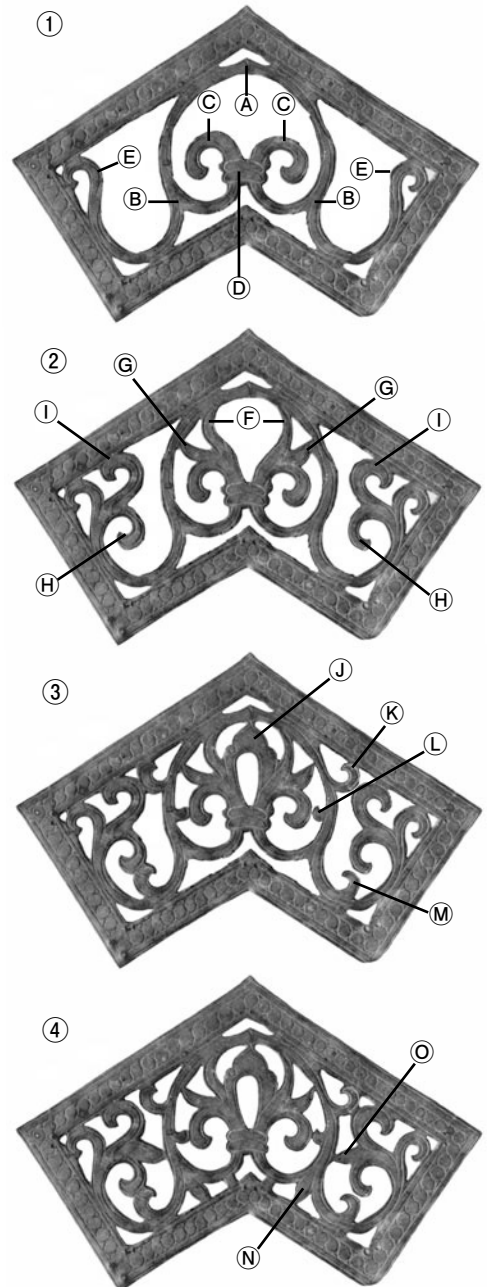
[第 1 類] (4 枚)

V 字形の装飾空間内に肥瘦のある植物的表現の曲線で左右対称の文様をつくるもので、同形式のものが 4 枚残っている。図 11 はこの文様構成を 4 段階で示したものである。[第 1 段階]では、基本曲線は A を起点として B で 2 本に分岐し、1 本 C は内部に反転し結束帯 D で結ばれ、もう 1 本 E は輪郭に接して波状曲線をつくる。[第 2 段階]では、反転曲線 C の内側に先端が起点 A に向かってのびる葉状曲線 F が加えられ、曲線 C と F の間に 1 枚の短い葉 G が挿入される。輪郭部にのびた波状曲線 E の先端には、内側に反転する曲線 H が加えられ、E の先端と H の間に外向きに反転する曲線 I が挿入される。[第 3 段階]では、結束帯 D で結ばれた左右 3 本の葉状曲線の狭間に、尖拱形で左右に小さな隆起部分を持った蕾形 J が差し掛けられ、基本曲線に K と L、曲線 E に M という 3 本の半 C 字形が付加される。[第 4 段階]では、分岐点 B および曲線 H と I の間に 2 個の紡錘形 N・O が挿入され全体が完成する。

以上の考え方とは別に、図 12 に示した中央の〈逆ハート先端巻き込み形〉部分をひとつの

単位文様として抽出してみる考え方もできる。この場合は須弥座腰部隅柱透彫り金具文様の単位文様(1)の巻き込み部分に、単位文様(2)ではなく左右 2 枚の葉形と蕾形が挿入付加された形式

図 11 透彫り金具第 1 種第 1 類



である。いずれとも即断できないが、この金具文様に関してのみいえば、図 11 の第 1 段階に見るように、その基本曲線の主流は内側に反転する◎曲線よりも輪郭部に続く波状曲線⑥にあるため、前者の文様構成と考える方が適当なようである。

[第 2 類] (8 枚)

図 13 の①に掲げたもので 8 枚残存している。金具の大きさは第 1 類の三分の一程度しかないため、内部空間の文様構成は第一類を簡略化したものとなり全体に粗雑である。図 14 は第 1 類と第 2 類の文様部分のみを比較したものであるが、第 2 類では結束帯下部の曲線が頂上部にまでのびる空間余地がなく、C 字形を二つ重ねるような充填形式で終わっている。V 字形金具第 1 種では、簡略形の第 2 類は特に問題化する必要もないが、第 1 類は植物系モチーフの〈逆ハート先端巻き込み形〉の造形展開を考えるのに重要な作例となる。またこの第 2 類のなかでもっとも形式退化したものは図 13 の②のようになる。

[第 3 類 (1 枚)・第 4 類 (2 枚)]

第 1 類と第 2 類の文様構成曲線が肥瘦のある植物的表現であったのに対して、図 15 の第 3 類の曲線はすべて均一な太さからなる抽象的表現であり、左右 10 個ずつ渦を巻く蕨手状の小さな先端もまたすべて同形である。第 4 類は大きさが第 3 類の三分の一程度であり、装飾空間が小さくなるに従い、文様構成も第 3 類を簡略化したものとなっていて、渦を巻く蕨手状の先端の数も左右 6 個ずつへと減っている。これは第 1 類に対する第 2 類の関係と同じであるが、第 4 類の装飾文様は第 2 類ほど粗雑なものではない。これは抽象的曲線文様の巧拙は装飾面積に影響されにくいことによるだろう。第 3 類は 1 枚、第 4 類は同形式のものが 2 枚残っている。

これらの文様曲線は一見して波状曲線のようなものであるが、先端を巻き込んだ半 C 字形（蕨手形）を次々に足して空間を充填していく加算的構成によって作られるものである。この文様には虺龍文系動物モチーフの痕跡はすでにな

く、モチーフを喪失した結果として、完全に抽象的曲線文様として作られたもので、中央に結束帯は二つあるにしても、明確な植物系モチーフの文様要素は組み込まれていない。虺龍文系動物モチーフと植物系モチーフ文様の間に位置する抽象化文様の基本作例として位置づけるべきものであろう。

2. 透彫り金具第 2 種 (1 枚)

図 16 の透彫り金具は、輪郭が蓮弁形で、装飾空間は周囲を帯状に囲んで円形文④を 17 個配した外区と内区に分かれる。内区には中心線上に猪目形空孔をもつ単位文様①・②・③を三つ並べる。単位文様①は須弥座腰部隅柱透彫り金具文様と文様構造を同じくするものであるが、こちらの文様では周囲を囲む〈逆ハート先端巻き込み形〉の部分と、巻き込み曲線の上に置かれる部分が完全に融合しており、玉虫金具のようにふたつの単位文様に分けることは難しい。玉虫金具のように単位文様(1)と(2)の組み合わせからなる複合文様と考えるよりは、これをひとつの単位文様とするほうが適当であろう。単位文様③は単位文様①に相対して逆さまに配置されたもので、その左右側面から上方に反転させた半 C 字形⑧・⑨の間に単位文様②が置かれる。単位文様②と③を合わせてひとつの複合文様と考えるまでの必要はないであろう。上方の単位文様①が有機的な構造をもつものに対して、下方半分の空間は、単位文様③、左右半 C 字形⑧・⑨、単位文様②と加算し、これらと上部単位文様①とをつなぐために、半 C 字形より巻き込み曲線⑩・⑪を出して、円形文④・⑤を充填している。

この透彫り金具文様が虺龍文系動物モチーフであることは明らかで、単位文様①や③に刻まれた並行細線も古様を示している。しかし単位文様①にみられる融合状態など、全体に形崩れが進行しており、動物系モチーフの意味を喪失した後、抽象化文様への転換がなされる以前の作例と位置づけることができるだろう。

Oct. 2008

法隆寺の透彫り金具文様

図12 透彫り金具第1種
第1類単位文様



図13 透彫り金具第1種第2類

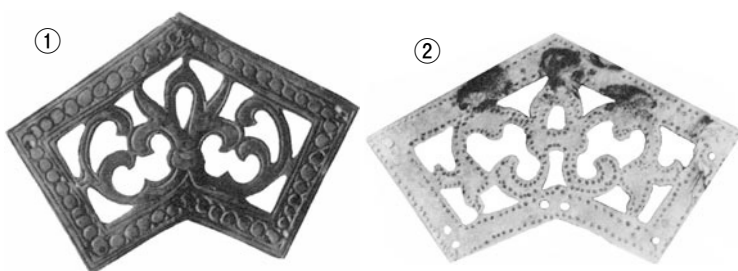


図14 透彫り金具第1類・3類文様比較②



図16 透彫り金具第2種①

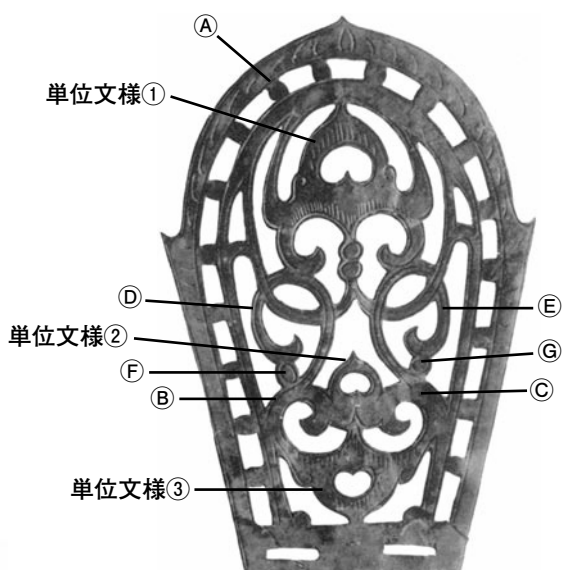
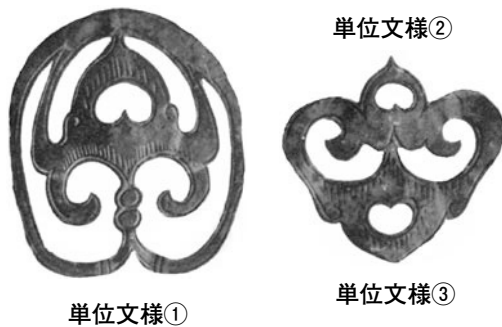


図15 透彫り金具第1種第3類・4類



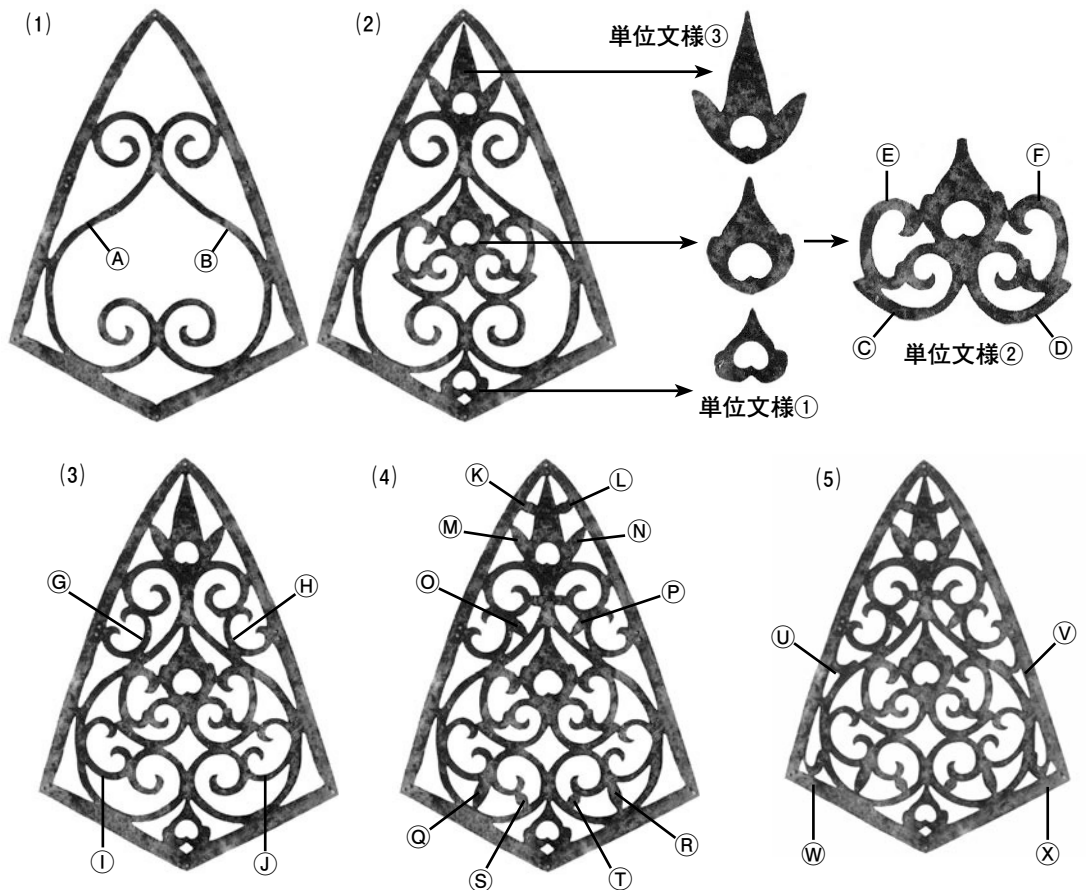
3. 透彫り金具第3種 (1枚)

図17の透彫り金具文様は、幅の細い抽象的曲線表現になるもので、その文様構成は5段階で考えることができる。[第1段階]では、まず両端を巻き込むS字形曲線(A・B)を背中合わせに配することで装飾空間を区分する。[第2段階]では、最下部の巻き込み曲線と外郭の間に単位文様①、中央の空間に、各ふたつずつの半C字形(C・D)とC字形(E・F)を伴った単位文様②、そして最上部の巻き込み曲線と外郭の間に単位文様③を配置する。[第3段階]では、残された空間に4つのC字形(G~J)文様要素を配置し、[第4段階]で10個の紡錘形(K~T)を挿入し、[第5段階]で、4つの小さな半C字形(U~X)文様要素を充填し

て完成させる。3つの単位文様①~③は、いずれも内部に猪目形が透かされた猪目形空孔文である。外側の輪郭は、単位文様①と②は同形で、上部中央Aがやや尖り、左右に小さな隆起部分(B・C)をつくる。単位文様③は上部中央と左右の突起部が極端に長く尖っているが、これは三角形の装飾空間を埋めるために単位文様①や②の突起部を尖らしたもので植物系モチーフの三葉全パルメットではない。単位文様②の問題点については、先に述べたところである。

図18は透彫り金具の残片であるが、輪郭からすると図17の先端部分に近い。ただし〈逆ハート先端巻き込み形〉の上に五葉全パルメットをおく文様構造は、上述した図8の蛇舌の先

図17 透彫り金具第3種



Oct. 2008

法隆寺の透彫り金具文様

図 18 透彫り金具断片



図 20 透彫り金具第 5 種

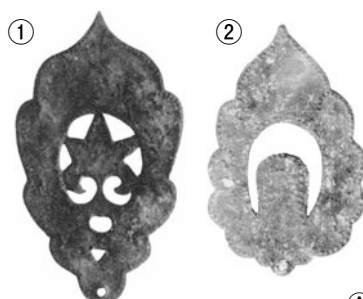
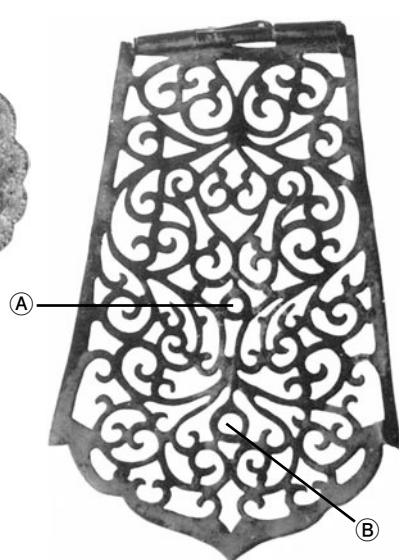


図 19 透彫り金具第 4 種



端部分と一致する。

4. 透彫り金具第 4 種 (1 枚)

図 19 の透彫り金具文様は細線の半 C 字形を充填していく抽象的曲線文様である。一応、波状曲線を基調にして左右対称な文様構成をなしているが、装飾空間全面を意図的、有機的な曲線構成で作るといよりは、大小の半 C 字形を加算的に積み上げていったものである。中央線上には二つの〈逆ハート形〉単位文様が退化して円形に近づいた文様要素①・②が見られるのも、虺龍文系動物モチーフの喪失と抽象化を示している。

5. 透彫り金具第 5 種 (2 枚)

図 20 の①は、輪郭が須弥座腰部隅柱透彫り金具文様の単位文様などの三山、五山形を想起させるものである。一応、〈逆ハート先端巻き込み形〉に三葉全パルメットを配した単位文様のバリエーションと考えてもよいであろう。②は外周の輪郭は類似するが、内部は文様化していない。

V 五重塔垂木・尾垂木・隅木木口透彫り金具の文様

法隆寺五重塔では垂木・尾垂木・隅木の木口に透彫り金具がつけられている。もっともこれらはいずれも後補で、垂木先の金具は発見された当初の金具によって、尾垂木先は木口に残った風食形から、隅木先は尾垂木先の金具に倣っ

て復元されたものである。

垂木木口の透彫り金具には、図 21-①・②の二種類がある。いずれも正方形で上下、左右が対称形となっているが、小さなものであるから、仮に下図を用いたとしても、全体の半分を描いて、それを上下ないし左右に反転させるというような描き方をするほどのものではなかっただろう。

①は五重塔の初層・三層・五層につけられているもので、装飾空間を四分割して、①と②を起点として左右に半 C 字形の蕨手形を 3 個、③、④、⑤というように加算していったもので、4 つの大きな C 字形のなかに③・④を組み込んだものではない。

②は二層と四層につけられているもので、中心部に〈逆ハート形〉①を 4 個、輪郭を接して並べ、それらの接点 4 箇所②から 2 本ずつ蕨手形をだして向き合わせ (③・④)、根元部分に紡錘形⑤を、上下の二箇所では蕨手形の先端が接する部分に紡錘形⑥を配している。残された四隅の空間は、同様の文様構造で、隣り合う蕨手形の接点③から、さらに次の 2 本の蕨手形をだして向き合わせ (⑦・⑧)、先端が接する部

分に紡錘形⑪を配す。

図 22 の③は尾垂木につけられた長方形の透彫り金具である。中心に〈逆ハート先端巻き込み形〉を 4 つ配している (A・B・C・D)。いずれも巻き込み曲線の上には切れ込みを入れた扇形Eをのせる。これは萼に蕾をのせた形にも似るが、植物文様と断定する根拠はない。中心部に 4 個組み合わせられたこの単位文様の上下空間を埋める曲線は、Eを起点として左右対称に蕨手形を 3 本、G・H・Iと加算したもので、さらに余剰空間に 1 本Jを充填している。これら曲線は上記②の木口金具よりもはるかに蔓草的な動きをもっており、虺龍文系の C 字形、S 字形曲線とは明らかに趣を異にしている。

④は隅尾垂木木口につけられた長方形の金具で、内部を四分割したものであるが、各区画内の文様構成は明確にはなしがたい。おそらく C 字形の組み合わせからなるものであろうが、この C 字形は四つの木口金具の中では、もっとも瘤節をもった虺龍文系の C 字形に近いものである。

注

- 1) 山本謙治「装飾文様史の課題」、笠井昌昭編『文化史学の挑戦』、思文閣出版、2005 年、52-70 ページ参照。
- 2) 山本謙治『玉虫厨子透彫り文様にいたる東アジア動植物モチーフ融合文様形成過程の研究』(平成 18~19 年度科学研究費補助金基盤研究(c))

図 21 五重塔垂木透彫り金具

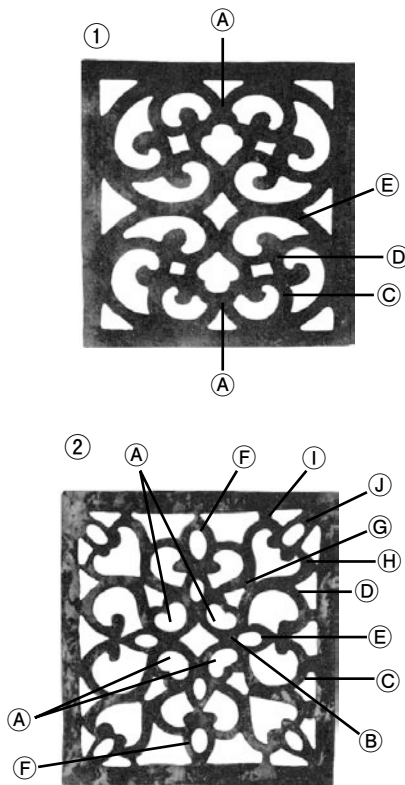
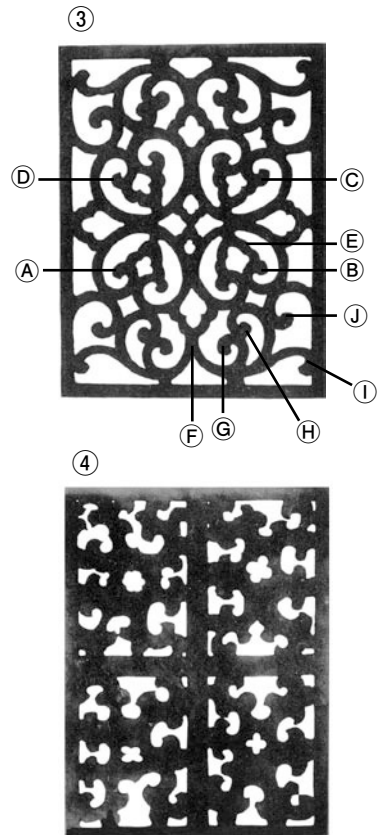


図 22 五重塔尾垂木と隅木木口透彫り金具



Oct. 2008

法隆寺の透彫り金具文様

- 報告書), 2008 年, 第 1 編 1-26 ページ参照。
- 3) 林良一「玉虫厨子」『奈良六大寺大観』第 5 巻, 岩波書店, 1971 年, 39-42 ページ。
- 4) 山本謙治「玉虫厨子透彫り金具虺龍文系文様の造形分析 —コンピュータ利用による文様分析の一例として—」『阪南論集人文・自然科学編』36-2, 阪南大学学会, 2000 年, 1-14 ページ参照。
- 5) 小杉一雄「玉虫厨子に見えたる文様の源流 —分立流雲文に就て—」『夢殿』14, 1935 年。
- 6) 上原和「玉虫厨子制作年代考 (六) —文様意匠より見た玉虫厨子の様式年代について—」『成城文芸』29, 1962 年, 『玉虫厨子 —飛鳥・白鳳美術様式史論—』所収, 吉川弘文館, 1991 年。
- 7) 山本謙治「玉虫厨子須弥座腰部隅柱の透彫り金具文様について —上原和説における文様分析と様式史的位置づけへの批判—」『阪南論集人文・自然科学編』37-4, 阪南大学学会, 2002 年, 25-39 ページ参照。
- 8) 金堂天蓋に関しては『奈良六大寺大観』第 2 巻, 岩波書店, 1968 年, 44-54 ページ参照。
- 9) 灌頂幡関係では以下を参照。『法隆寺献納宝物特別調査概報XI 灌頂幡』東京国立博物館, 1990 年。『法隆寺献納宝物特別調査概報XII 金銅小幡』東京国立博物館, 1991 年。沢田むつ代「法隆寺献納宝物の金銅灌頂幡と繡仏」『MUSEUM』第 564 号, 1998 年。加島勝「法隆寺献納宝物灌頂幡の模造品製作について」『MUSEUM』第 567 号, 2000 年。
- 10) 『南都十大寺大鏡』(大塚巧藝社, 1938 年) 第 7 輯, 図 86~88, および第 11 輯, 図 20~22 による。
- (2008 年 7 月 11 日掲載決定)